

「あそびなどす」「いらへなどす」と、それらに類似する異表現

―併せて、動詞「す」のはたらきを観察し、

大島本・胡蝶の巻の誤脱を指摘する―

中村 幸弘

○承前

小稿は、前稿「例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について」^{注①}を承けて展開される。

さて、小稿の題目は、「あそびなどす」「いらへなどす」に類似する異表現ではない。「あそびなどす」「いらへなどす」という表現に注目したうえで、「あそび」「いらへ」と動詞「す」とで構成される類似の異表現にも注目していこうとするものである。「あそび

というように、「と」の下にあえて読点を施した所以である。

「あそびなどす」「いらへなどす」は、動詞「あそぶ」「いらへ」に副助詞「など」を共起させた結果、補助動詞「す」が起用されて成立した表現である。その「あそびなどす」「いらへなどす」に類似していて異なる表現として最も注目しなければならないのは、連用形名詞「あそび」「いらへ」が格助詞「を」と他動詞「す」を伴った「あそびをす」「いらへをす」―「あそびをす」

は実際には非存在の存在である。そのうえで、その類似する異表現と、それらと関わる動詞「す」のはたらきを観察していきたい。なお、小稿も、その用例資料は、新編日本古典文学全集『源氏物語』に拠ることとする。また、それら用例資料の所在ページについては、巻名の下にアラビア数字の横書きをもつて示すこととした。

第一章 標題に向けて問題提起させた動機

「あそびなどす」「いらへなどす」が、「あそぶ」「いらふ」に「など」を共起させて、補助動詞「す」を起用し、成立させた表現であることは、前稿「例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について」において確認したところである。その「あそび」「いらへ」以外の、そこに位置する動詞が、異なり語数として百二十四語に及ぶところから見ても、その成立過程は、容易に理解できよう。それはそれとして、「あそび」「いらへ」と「す」とから構成される類似の表現が多様に存在する。いま、その「あそび」「いらへ」と「す」とから構成される類似の表現を、適宜、それ

ぞれに三用例ずつ引いて、その類似の実態を実感したいと思う。

「あそびなどす」と類似の表現

○…、御前の藤の花いとおもしろう咲き乱れて、見過ぐさむこと惜しき盛りなるに、遊びなどしたまひて、…。(③藤裏葉^{つばき})

○夕月夜のをかしきほどに出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうの折は、御遊びなどせさせたまひしに、…。(①桐壺^{きりぎりす})

○帝「遊びなどもせず、昔聞きし物の音なども聞かで久しうなりにけるかな」とのたまはするに、…。

(②明石^{あかし}274)

「いらへなどす」と類似の表現

○…、この右近召し寄せて、匂宮「…。時方は、京へものして、山寺に忍びてなむと、つきづきしからむさまに答へなどせよ」とのたまふに、いとあさましくあきれて、…。(⑥浮舟^{うきふね}26)

○…、さやうに世づいたらむこと言ひ出でんもいと心憂く、また言ひそめては、かやうのをりをりに責められむも、むつかしうおほゆれば、答へをだ

にしたまはねば、あまり言ふかひなく思ひあへり。

(⑥手習316)

○右近を召し出でて、源氏「かやうにおとづれきこえん人をば、人選りしてて答へなどはせさせよ。」

…。(③胡蝶177)

Aa・Ab・Acの「遊び」、Id・Ie・Ifの「答へ」は、それぞれのように異なるのである。動詞連用形であることが明らかな用例、連用形名詞であることが明らかな用例は、それぞれであろうか。S a・S b・S cの「す」、S d・S e・S fの「す」のうち、確かに補助動詞「す」といえるのは、どれであろうか。他動詞といえるのは、どれであろうか。その判断に苦しむ用例は、どのように悩ませられるであろうか。

右の六用例は、あらかじめことわっておいたように、たまたま引いてみせたものである。その六用例のなかには、表現形式としては同一の用例が二組存在するところから、表現形式としては、四とおりが認められることになる。動詞としても一定数の用例を見せ、連用形名詞としても定着している「あそび」「いらへ」と「す」

とよって構成される表現形式は、認識順序をも考慮して整理すると、十とおりとして認識していくのが適切かと認識している。

右の整理は、前稿「例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について」執筆に先立って、その必要を感じていたところである。この整理ができていまままでは、「あそびなどす」「いらへなどす」と類似の諸表現が十分には理解できないと感じた日から、その取り組みは始まったが、中断されたまま、少なくとも二十年以上が経過してしまった。「補助動詞「す」の論」^{註①}「居言雑考―その造語経緯について―」の旧二稿の不備を補い、僅かな前進を期待しての準備作業も、意味の読みとれないメモと化していた。

たまたま、数年前、胡蝶の巻の次の本文に違和感を覚えて、暫く悩んで、その「する」を補助動詞として読みとることを手掛かりに、そこに誤脱を認めなければならぬと感じた日があった。小稿への契機である。

○殿の中将は、すこしけ近く御簾のもとなどにも寄りて、御答へみづからなどするも、女はつつましう思せど、さるべきほどと人々も知りきこえたれ

ば、中将はすすくしくして思ひよらず。(③胡蝶 175)

第二章 「あそび」と「す」／「いらへ」と「す」 によって構成される諸表現の形式別

1 動詞に副助詞「など」を共起させた結果、補助動詞「す」が起用された表現 (A形式)

前稿「例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について」において、そこに補助動詞「す」が起用された用例を、異なり語数として百二十四語の動詞と共に起する異なり用例百二十四用例を見てきている。動詞が補助動詞・補助動詞を伴った語句にも同趣の現象を見ることができ、それらを併せると、異なり用例百五十三用例に及ぶ実態が存在することになる。さらに、そこに、既にことわってきているように、小稿が取り立てる動詞「あそぶ」「いらふ」に關係する用例は含めないことにしてあった。したがって、動詞に副助詞「など」を共起させた結果、そこに補助動詞「す」が起用された用例は、都合、異なり用例百二十六用例ということになる。

そこで、「あそぶ」「いらふ」に「など」を共起させた結果、そこに補助動詞「す」が起用された用例を掲げることとする。それぞれの第一用例は・前章・第一章に引いたアa・イdの用例である。アa・イdは、ともに動詞連用形であり、アa・スdの「す」は、ともに、補助動詞「す」であることが明らかとなった。

ア1〇…、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、…、ただに見過ぐさむこと惜しき盛りなるに、遊びなど、□たまひて、…。(③藤裏葉 434)

ア2〇内大臣「つれづれに思されんを、姫君渡して、もろともに遊びなど、□たまへ。…」と聞こえたまひて…。(③少女50)

ア3〇…、御琴ことどもとりどりに弾かせて、遊びなど、□たまふ。(④若菜下183)

ア4〇…、大納言ここに遊びなど、□たまうしをりを、思ひ出でたまふ。(④夕霧52)

イ1〇…、この右近を召し寄せて、句くま…。時方ときかたは、京へものして、山寺に忍びてなむと、つきづきしからむさまに答へなど、□せよ」とのたまふ

に、いとあさましくあきれて、…。(⑥浮舟 126)

イ2○源氏「…。ただ昔恋しき慰めに、はかなきことも聞こえん。同じ心に答へなど、□たまへ」と、いとこまやかにきこえたまへど、…。(③胡蝶189)

イ3○円座わらふださし出でたれば、簾すだれのもとについで、小君「かやうにてはさぶらふまじくこそは、僧都はのたまひしか」と言へば、尼君ぞ答へなど、□たまふ。(⑥夢浮橋386)

以上は、副助詞「など」によって起用された補助動詞の原則的な用法の用例である。

2 動詞に係助詞「は」「も」を共起させた結果、

補助動詞「す」が起用された表現(B形式)

旧稿「補助動詞「す」の論」における調査結果として、補助動詞「す」を起用する原因となっていた係・副助詞は、連語助詞を認めて、「や」「も」「やは」「ぞ」「こそ」「もこそ」「もや」「もぞ」「しも」「だに」「のみ」「は」——八代集を資料に、用例数の多い順に配列した

——の十二語であった。本来、和歌において発生した、この表現法を、『源氏物語』散文においては、副助詞「な」を諸動詞と共起させようとして、採用したのであった。

そこで、『源氏物語』散文において、動詞「あそぶ」「いらふ」に「も」以外の係・副助詞を共起させる必然性がどれほどにあったかという点、「あそぶ」については、その必要の機会がまったくなく、「いらふ」についても、係助詞「は」「も」に限られていた。以下に、その用例を掲げることとする。もちろん、そこに見る「す」は、補助動詞「す」である。なお、一般に、係助詞は「は」「も」の順に取り扱うが、ここでは、その用例数の違いから、「も」「は」の順に掲げることとする。

イ4○柏木「…。」と言ひもてゆくに、この人なりけりと思すに、いとあさましく恐ろしくて、つゆ答へも、□たまはず。(④若菜225)

右のイ4に見る「も」は、文末の「す」がこれに呼応していて、打消表現を強調する用法ということになる。「も」の用例は、すべてこの用法のもので、イ

5 「答へも、□たまはひ、」(④若菜下252) / イ6 答へも、□たまはず、」(⑤総角246) / イ7 「答へも、□たまはねど、」(⑤総角272) / イ8 「答へも、□せず、」(⑥浮舟120) / イ9 「答へも□ねど、」(⑥浮舟192) の五用例がさらに検出でき、都合、六用例存在することになる。

イ10「さしもあるまじきことなれど、さすがにをかしよう思ほされて、いづれならむ、と胸うちつぶれて、源氏「扇をとられてからきめを見る」と、うちおほどけたる声に言ひなして、寄りゐたまへり。「あやしくもさま変へける高麗人かな」と答ふるは心知らぬにやあらん。答へは□で、ただ時々うち嘆くけはひする方に寄りかかりて、几帳こしに手をとらへて、…。

(①花宴38)

右のイ10の「は」は、「答ふる」行為を特に取り出してそれと限って強調している、ということになるのか。「答ふる」行為はしないで(いるのだが)、ただ時折ため息をつく気配がしているのである。「は」によって起用された補助動詞「す」はこの一例だが、とにかく、この用例も、打消表現に関わっている。それと限つ

ての打消である。八代集に見た「は」の用例は、「いづこにもさきは□らめど…」(後撰・三三二九/拾遺・一三二)であった。その「咲き」は、「は」によって、それと限定され、それだけが現在推量の対象となっているのである。その「咲き」に連用形名詞化はまったく考えられなく、したがって、イ10の「答へ」も、動詞連用形と見ることに、大方の同意が得られよう。

以上、「いらふ」に「は」「も」を共起させた結果、そこに起用された補助動詞「す」の用例を見てきたが、「あそぶ」については、まったく、その用例を見るこゝとがなかった。「あそぶ」という動詞の動作に係・副助詞を共起させる必要がないからなのであろうか。あるいは、「あそび」という連用形名詞の存在が、別の表現形式による係・副助詞との共起を可能にしていたのであろうか。「いらふ」についても、その補助動詞「す」を起用する用例が「は」「も」に限られるのは、何がそうさせるのであろうか。「いらふ」にも「いらへ」という連用形名詞が一定の定着を見せている。とにかく、「あそぶ」「いらふ」ともに、「など」を共起させた結果、補助動詞「す」を起用した用例数に比して、

それ以外の係・副助詞を共起させた用例は、まったく見られなかったり、極端な偏りを見せたりしたのであった。

3 連用形名詞が格助詞「を」と他動詞「す」とを伴って構成されている表現（C形式）

連用形名詞が格助詞「を」と他動詞「す」とを伴う、とはいっても、その連用形名詞には、以下の三とおりの相違が認められる。その連用形名詞が単独で用いられている場合（一）と、その連用形名詞が接頭語「御」を冠している場合（m）と、その連用形名詞が連体修飾語を冠している場合（n）との相違である。以下、それぞれに、その用例を掲げていくこととする。

（一）連用形名詞が単独で格助詞「を」と他動詞「す」とを伴って構成されている表現（C・1形式）

連用形名詞は、活用語としての機能を放棄したものである。その無活用語としての連用形名詞が格助詞「を」と他動詞「す」とを伴って、一旦失った活用語性を取り戻そうとするのは、どのような表現のメリックであったのか。あそび」「いらふ」

についていえば、それは、「あそびをす」「いらへをす」という表現である。ただ、実態としては、『源氏物語』に見ることができたのは、「いらへをす」だけであった。イ11○少将「…。塚の上にもかけたまふべき御心の

ほどを思ひたまへましかは、ひたみちにも急がればべらましを」などあるに、「うたても答へを^{ぶち}してけるかな。書きかへてやりつらむよ」と苦しげに思して、ものものたまはずなりぬ。(⑤竹河(6))

そこに、「を」という格助詞がある以上、その「答へ」は連用形名詞である。そのように名詞「答へ」を用いてはいるが、その「答へをしてけるかな」は、「答へてけるかな」とどれほどに違うのであろうか。この場合、その返事をしてしまったことを後悔しているところからは、その「してけるかな」の「し」は、〈答へ〉た行為よりも、返信を〈送つ〉た行為をいうものとも解せよう。書き改めないで届けてしまったことを悔いているのである。

『源氏物語』に「あそびをす」は存在しなかったが、時代下って『梁塵秘抄』には、「遊びを^{せんと}や生ま

れけん」と唄われている。「遊び」の概念にはずれが生じていたとしても、表現形式としては、「連用形名詞+を+す」である。

『源氏物語』の「連用形名詞+を+す」の用例は、「あそび」「いらへ」についていうと、IIの「答へ+を+す」に限られていたが、以下の(m)・(n)については、この表現形式を基底に発想されているものと見なければならず、その(m)・(n)には、その該当用例が存在したのである。したがって、「あそびをす」は存在したが、『源氏物語』という文献には残りえなかった、ということになるのか。また、この表現形式に直結して展開された、格助詞「を」の下に係・副助詞をさらに介在させた表現については、追って7(G形式)として取り立てることになる。

- (m) 連用形名詞が接頭語「御」を冠して、格助詞「を」と他動詞「す」を伴って構成されている表現 (C・m形式)

敬語接頭語「御」が冠せられていることから、その動詞連用形相当形が名詞であることを証明している、ということができよう。連用形名詞「あそび」「い

らへ」の総数に比して、「御」を冠した「御あそび」「御いらへ」は、比率高く現れる。ただ、格助詞「を」と他動詞「す」とを伴って、「御+連用形名詞+を+す」となって現れる表現は、「御遊び+を+す」に限られる。

以下に、その用例を掲げることとする。第一章のAbとした「遊び」も、この「御遊び」だが、副助詞「なご」を添えていて、格助詞「を」が表出されていない。続いて、ヲ格の非表出用例として整理していくこととしたい。そこで、「御遊びをす」は、次の一用例である。

- A5〇明け暮れ御遊びを^せさせたまひつつ、侍従も
け近う召し入るれば、御琴の音などは聞きた
まふ。(⑤竹河⁹⁶)

さて、「御いらへ」は、多くの用例を見せるが、問題ある一用例を除いて、その動作を他動詞「す」を用いて表現されることはなかった、と見ておかなければならない。その問題ある用例については、7(G形式)において取り立てることを予告しておく。

- (n) 連用形名詞が連体修飾語を冠して、格助詞「を」と他動詞「す」とを伴って構成されている表現 (C・n形式)

連用形名詞「あそび」「いらへ」に連体修飾語が冠せられている用例を『源氏物語』のなかに見ることはできない。「御遊び」に連体修飾語が冠せられている用例として、次の一用例を挙げることができる。

ア6〇御心につくべき御遊びを^レ、おほなおほな思
しいたつく。(①桐壺149)

右のア6の「し」についても、その「し」は、具体的にどのような動作を読みとらせようとしているのであろうか。この場面からは、演奏を〈なさる〉ことなどでなく、演奏会を〈お開きになる〉ことだとわかつていて、尋ねてみたくなるのである。

以上が、連用形名詞が格助詞「を」と他動詞「す」とを伴って構成されている表現用例である。

4 連用形名詞が非表出のヲ格を挟んで他動詞「す」を伴って構成されている表現(D形式)

表現の可能性としては、この4においても、さきの3(C形式)において設けた(1)・(m)・(n)の別が想定される。そして、その実態としては、その(m)に相当する一用例が存在した。この4においては、(o)

として取り扱うこととする。また、このヲ格非表出の表現には、その「ヲ」の上に副助詞「など」「ばかり」が位置する用例が認められた。そこで、その「御^{注④}or連体修飾語+連用形名詞+など/ばかり+「ヲ」+「す」表現を(p)として取り扱うこととした。

(o) 連用形名詞が接頭語「御」を冠して、非表出のヲ格を挟み、他動詞「す」を伴って構成されている場合(D・o形式)

ア7〇月のはなやかなるに、昔かうやうなるをりは
御遊び「ヲ」^{注④}させたまひて、いまめかしう
もてなさせたまひしなど思し出づるに、∴。

(②賢木126)
「御+連用形名詞+「ヲ」+「す」表現は、右の一用例である。

(p) 連用形名詞が接頭語「御」、または連体修飾語を冠して、しかも、副助詞「など」か「ばかり」かを添え、非表出のヲ格を挟み、他動詞「す」を伴って構成されている場合(D・p形式)

この表現形式のなかに見える「など」と、動詞と共にさせるために補助動詞「す」を起用した副助詞「など」

とは、例示する事柄が異なる、といわなければならぬ。A形式の「など」は、それぞれの動詞を例示していたが、ここに見る「など」は、それぞれの連用形名詞を例示している、ということになる。第一章においてアbとして、他の「遊び」との違いを観察してきている「遊び」は、「御遊び」であつて、さらに「など」を伴つていて、次に非表出のヲ格が読みとれるところから、この4の(P)の第一用例ということになる。

ア8〇(省略) かうやうの折は、御遊びなど、〔ヲ〕
 せさせたまひしに、…。(①桐壺36)

ア9〇例の、中将の君、こなたにて御遊びなど、〔ヲ〕
 したまふに、…。(①紅葉賀329)

ア10〇月はさし出でぬれど、花の色さだかにも見えぬほどなるを、もてあそぶに心を寄せて、大御酒まゐり、御遊びなど、〔ヲ〕したまふ。(③藤裏葉437)

イ12〇源氏「…。なかよそにてもなつかしき答へばかり、〔ヲ〕はしたまふまじき。…」など、心づきなしと思ひてのたまふ。(①空蟬129)

イ13〇源氏「…。昔よりこよなうけ遠き御心ばへな

るを、さうざうしきをりをり、ただならで聞こえなやますに、かしこもつれづれにものしたまふところなれば、たまさかの答へなど、〔ヲ〕したまへど、まめまめしきさまにもあらぬを、かくなむあるとしも愁へきこゆべきことにやは。…」など、…。(②朝顔406)

以上、「御」を冠したり、連体修飾語を冠したりした連用形名詞が非表出のヲ格を挟んで他動詞「す」を伴つて構成された表現である。そのうち、イ12だけが、その非表出のヲ格の後に係助詞「は」を介在させていて、上の副助詞「ばかり」とともに限定のはたらきを強化しているものと読みとれようか。それ以外は、その連用形名詞(「御」遊び「答へ」が副助詞「など」を添えている。例示性よりも同類がそこに存在することを意味しているように感じとれるのは、そのようにヲ格によつて受けとめられているからであろうか。

さらに、それら五用例の他動詞「す」が具体的にどのような意味を担っているかを読みとろうとしたとき、それは、「遊び」の規模や「答へ」の対象者などによつて、幅広い異同が生じるようにも思えてきた。

「あそぶ」「いらふ」では表現できない何が表現できているのであろうか。

× × ×

実は、連用形名詞といってもよい「あそび」「いらへ」に動詞「す」を直接させた「あそびす」「いらへす」という用例が存在する。「遊びす」「答へす」三用例の計五用例の存在が確認できている。それらについては、ヲ格の非表出と見て、「遊び〔ヲ〕〔す〕」「答へ〔ヲ〕〔す〕」として取り扱うことができそうにも思えたが、一方に、動詞連用形相当形に、さらに動詞「す」を直接させた、その用例を、長く一単語相当に取り扱ってきている慣行の十単語ほどが当代までに存在するところから、この「遊びす」「答へす」の取り扱いに悩んでいるのである。その一単語相当に取り扱われる「消えす」「絶えす」などは既に、学習用古語辞典の類に立項されて久しい。^{注5)}「遊びす」「答へす」という図解が、各用例の読解に抵抗を感じないことを自身に確認して、次の5（E形式）を設けて取り扱うこととした。

5 動詞連用形相当形に動詞「す」を直接させて、無活用語化した動詞連用形相当形に再度活用語性を賦与した表現（E形式）

前項4の末尾の × × ×印以降において、その取り扱いに長く悩んできている旨、告白した一群の表現が、この5（E形式）において取り立てる表現である。以下に、その各用例を掲げることとする。

ア11○夕霧、「…。対の前の藤、常よりもおもしろう

咲きてはべるなるを、静かなるころほひなれば、遊びせんなどにやはべらむ」と申したま

ふ。(①藤裏葉⁵⁵⁾)

ア12○冷泉院「故六条院の踏歌の朝に女形にて遊びせ

られける、いとおもしろかりきと右大臣の語られし。…など思しやりて御琴ども調べさせたまひて、…この殿など遊びたまふ。(⑤

竹河⁹⁹⁾)

イ14○空蟬「中将の君はいづくにぞ。人け遠き心地

して物恐ろし」と言ふなれば、長押の下に人々臥して答へすなり。(①帚木⁹⁸⁾)

イ15○薫「…。うとうとしく思すべきにもあらぬを

心憂の御気色けしきや」と恨みたまへば、答へこたへすすべ
き心地もせず、思はずに憎く思ひなりぬるを、
…。(⑤宿木427)

イ16〇立ちてこなたにいまして、僧都「ここにやお
はします」とて、几帳きちやうのもとについゐたまへ
ば、つつましかれど、ゐざり寄りて答へこたへすすた
まふ。(⑥手習534)

ここで、これら「遊びす」「答へす」の「す」につ
いて、自・他の別をあえて示さない理由を述べておか
なければならぬ。これら「遊びす」「答へす」が「遊
ぶ」「答ふ」に言い換えられるところからも、そして、
その「遊ぶ」「答ふ」が自動詞である以上、「遊びす」
「答へす」は、自動詞ということになるであろう。ただ、
一般に、自動詞の「す」は、「音—す」「長雨—す」な
どの「す」である。それら「す」の訳語を、筆者は(感
じられる)に限っている。自動詞の「す」として、い
ま一項加えると、助動詞の一部とみてよい「むとす」
の「す」である。そして、次に問題としたいのが、こ
の一群の「自動詞の連用形相当形+す」の「す」であ
る。

その一群とは、既に旧稿「補助動詞「す」の論」に
おいても触れてきている「離れす」「消えず」「朽ちす」
「尽きす」「絶えず」「旧りす」などである。自動詞
「離わかる」「消くゆ」「朽くつ」「尽つくく」「絶たゆ」「旧ふるる」に動詞
「す」が直接して新たに活用語であることを鮮明にし
た一群の動詞である。上代においても、「枯れす」「死
にす」「生はえず」「欲ほりす」などが、それらに相当する。
いま、小稿で注目している「遊びす」「答へす」につ
いても、自動詞に動詞「す」が直接して、自動詞とし
て存在している点では共通していることにもなる。そ
で、その「す」は、他動詞ではない。しかし、単独
で自動詞、ということではない。そこを考えて、自・
他の別を示すことを避けてきているのである。

6 「動詞連用形+など+補助動詞す」(A形式) 表現に、さらに、その「など」の下に係助詞「は」 「も」を介在させた表現(F形式)

「あそぶ」「いらふ」に「など」を共起させた結果、
補助動詞「す」が起用されて、そこに構成された表現
が「あそびなどす」「いらへなどす」である。そのA

形式の「など」の下に、さらに係助詞「は」「も」が介在している表現については、第一章の、それぞれの類似の表現に各一用例ずつ引かれていた。A cとI fとである。「は」「も」の配列にはこだわらないで、A・Iの、それぞれの第一用例として掲げることとする。

ア13○帝「遊び^なども^せず、昔聞^きさし物^{もの}の音^ねなども聞^きかで久^くしうなりにけるかな」と…。(②明

石214)

ア14○まだ暁に出でたまふとても、こなたに渡りたまひて、八の宮「なからむほど心細くな思しわびそ。心ばかりはやりて遊び^なども^は、[□]たまへ。…」など、かへりみがちにて出でたまひぬ。(⑤

椎本187)

ア15○二十日の月やうやうさし出でて、をかしきほどなるに、帝「遊び^なども^は、[□]まほしきほどかな」とのたまはず。(②賢木129)

イ17○源氏「かやうにおとづれきこえん人をば人選^えりして答^{こた}へ^なども^は、[□]せさせよ。…」。(③胡蝶177)

右の各用例について、見出しに示したように、「あ

そびなどす」「いらへなどす」というA形式表現に係助詞「は」「も」が介在している表現というように感じとつてきている。そこで、そのように、見出しにも示したのだが、「は」「も」が介在しないA形式表現と同じように、ア13「遊び^なども^は」が「[□]せす」の被補助語であるのか、イ17の「答^{こた}へ^なども」が「[□]せさせよ」の被補助語であるのか、少しく不安に感じられてもきたのである。もし、それらが被補助語であるならば、「遊び」や「答^{こた}へ」は、動詞連用形でなければならぬ。名詞と感じとれたら、そして、連用形名詞と判断されたら、「[□]せす」の「せ」は、補助動詞ではないことになるのである。

ア13の用例は、第一章でA cとして見てきた「遊び」である。その「遊び^なども^は、[□]せす」は、後続する「…物の音^ねなども聞^きかで」と打消の並立関係にあるようにも見えてくる。もしそうであったとしたら、その「遊び」は名詞と感じとれ、「遊び^なども」は、非表出のヲ格で、補充成分「遊び^なども」(ヲ)「も」と見えてきて、「[□]せ」は、他動詞「す」と読みとれてしまつてあろう。イ17も、第一章でI fとして見てきた「答^{こた}へ」であ

る。その「答へ^いなどは、せさせよ。」において、その「は」が何を取り立ててどれほどに強調しようとしているのかを読み解くことは容易ではない。「は」が「答へなど」を取り立てて、限定して強調していると読み解いた場合、非表出のヲ格が感じとれ、「答へ」も名詞と感じとれて、「せさせよ」の「せ」は、他動詞の「す」と見えてくる。そこで、いま一度読み返して、「かやうにおとづれきこえん人をば」の「をば」の存在に気づかされたとき、「答へなど」「ヲ」ば」と読むことが許されなくなってくる。そのように、イ17の「答へ」は、一瞬連用形名詞と見えて、それが許されないことに気づかされても、なお、自信をもつてする判断には至りえないようである。

ア14・ア15の用例も加えて、これら、A形式に「は」「も」を介在させた表現は、A形式表現とどれほどに相違するのであろうか。いま、この6（F形式）については、その判断に悩むことを確認するにとどめることとする。

7 「連用形名詞+を+他動詞」(C形式)に、

さらに、その「を」の下に係・副助詞を介在させた表現（G形式）

3（C形式）において、その連用形名詞については、（1）単独で用いられている用例、（m）接頭語「御」を冠して用いられている用例、（m）連体修飾語を冠して用いられている用例の別を設けてきた。この7（G形式）では、もはや、その別は明らかでない事案であるので、小分類することなく、一括して取り扱うこととする。

以下に、その該当用例を掲げるが、第一章において類似の表現として引いた用例のなかのイeの「答へ」は、この7（G形式）の「答へ」であった。改めて、7（G形式）のイの第一用例のイ18として再掲することとする。

ア16〇…、弘徽殿には、久しく上の御局にも参上りたまはず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをぞ^①たまふなる。（①桐壺³⁹¹）

ア17〇中宮ぞ、なかなかまかでたまふこともいと難うなりて、ただ人の仲のやうに並びおはしまずに、いまめかしう、なかなか昔よりもはな

やかに、御遊みあそびびなどをも、たまふ。(④鈴虫 391)

イ18〇…、(省略)、かやうのをりをりに責められむも、むつかしうおぼゆれば、答こたへをだに、たまはねば、あまり言ふかひなく思ひあへり。

(⑥手習316)

イ19〇思したりしさま、これに多くは御心も乱れにしぞかしと思すに、さるべきとはいひながら

も、いとつらき人の御契ごちぎりなれば、答こたへをだに、たまはず。(④夕霧411)

イ20〇闇くらにまどひたまへる御あたりに、いとまばゆくにはひ満ちて入りおはしたれば、かたはらいたうて、御答ごこたへをだに、たまはねば、…。(⑤

椎本196)

右のア16に見る「遊び」やイ18・イ19に見る「答へ」は、ア17の「御遊び」やイ20の「御答へ」よりは遅れるが、続く格助詞「を」から、直ちに名詞と判断される。したがって、ここに見る「す」は、すべて他動詞の「す」であることが理解される。

「あそびをす」は、その格助詞「を」の下に介在す

る助詞が強調の係助詞「ぞ」と添加の係助詞「も」とあつて、いずれも肯定表現である。それに対して、「いらへをす」は、否定表現のために存在するかに見える実態で、格助詞「を」の下に副助詞「だに」を介在させて、打消の助動詞「ず」で応じ、程度の軽いものとしてあげた「答へ」から、言外に重いものを類推させる表現を構成している。そして、「答へ」は、その「…をだにせず」と結びついているのである。

ここで、いま一点、イ20の用例に見る「御答へ」に添えられた「など」に注目したい。既に、4 (D形式) のア8・ア9・ア10に見たとところで、連用形名詞に添えられて、非表出のヲ格の上に位置していた「など」である。その同類を意味しているといつてよい「など」が、格助詞「を」の上に位置して、さらに、その下に副助詞「だに」が介在している点から、その「など」に一般には誤解とされる接尾語性を感じてしまうのである。

8

連用形名詞が非表出のヲ格を挟んで他動詞「す」を伴っている表現 (D形式) に、さらに、

その非表出のヲ格の下に係助詞「は」「も」を介在させた表現（H形式）

7（G形式）において観察した、3（C形式）の格助詞「を」の下に係助詞「は」「も」を介在させた表現に続けて、4（D形式）の非表出のヲ格の下に係助詞「は」「も」を介在させた表現を観察していくこととなった。

ア18〇七月七日も、例に変わりたること多く、御遊びなど、「ヲ」も「たまひて、つれづれにながめ暮らしたまひて、星逢ひ見る人もなし。（④幻543）

ア19〇八の宮「あはれに久しくなりにけりや、かやうの遊びなど、「ヲ」も「せ」で、あるにもあらで過ごし来にける年月の、さすがに多く数へらるるこそかひなけれ」などのたまふついでにも、
…。（⑤椎本171）

イ21〇浮舟「心深からむ御物語など聞きわくべくもあらぬこそ口惜しけれ」と答へて、この厭ふにつけたる答へ「ヲ」は「たまはず。（⑥手習354）

連用形名詞が非表出のヲ格を挟んで他動詞「す」を伴っている表現に、さらに、その非表出のヲ格の下に係助詞「は」「も」を介在させた表現である。ア18の用例もア19の用例も、その非表出のヲ格の下に介在させている助詞は、ともに係助詞「も」であるが、ア18の「も」は添加のはたらきのものであるのに対して、ア19の「も」は、打消表現を強調しているものといえよう。そして、その連用形名詞「遊び」は、ともに、同類を意味するかに思える「など」を添えている。助詞とは感じとりにくい「など」である。また、イ21の用例に見る、非表出のヲ格の下に介在する助詞は、係助詞「は」である。そのヲ格が「を」として表出されていた場合には、「は」となるところだが、「は」だけであることよって、それと限定する姿勢が強く感じられるようでもある。

実は、このH形式に相当する次の一用例だが、その「つゆの御答へ（ヲ）も「たまはず」の「し」については、当代の表現として疑義を感じるところから、番外の用例として引いておくにとどめ、追って、第四章

において、改めて取り上げることとする。

○源氏「あなうたて。これはいとゆゆしきわざよ」とて、よろづにこしらへきこえたまへど、まことにいとつらしと思ひたまひて、つゆの御答へ、「ヲ」も□たまはず。(②葵72)

9 動詞に副助詞「など」やその他の係・副助詞

を共起させた結果、補助動詞「す」が起用された表現（A形式・B形式）の補助動詞「す」の上、副詞、または副詞相当語句を介在させた表現（I形式）

もはや、A形式・B形式の別について区別する必要はない段階に到達している。また、副詞と副詞相当語句とを区別して取り扱わなくてもよいと判断して、以上に該当する用例を以下に掲げることとする。

A20○遊びなど、いとおもしろう□たまひて、夜すこし更けゆくほどに、源氏の君、いたく酔ひなやめるさまにもてなしたまひて、紛れ立ちたまふ。(①花宴364)

I22○あさましきまで恨み嘆けば、この前申しもあ

まり戯れにくくいと思ひて、答へもをささ^せす。(⑤竹河84)

I23○この宿守にて住みける者、時方を主と思ひてかしづき歩けば、このおはします遣戸を隔てて所得顔にみたり。声ひきしじめ、かしまりて物語しをるを答へもえ^せすをかしと思ひけり。(⑥浮舟153)

A20の用例は、「遊びなど、□たまひて」の補助動詞「し」の上に、「いとおもしろう」「いと」は形容詞連用形「おもしろう」を修飾するだけの程度副詞——という副詞相当語句が介在していると見ることができ。I22の用例は、「答へも^せす」の補助動詞「せ」の上に、「をさをさ」という副詞が介在していることになる。I23の用例も、「答へも^せす」の補助動詞「せ」の上に、「え」という副詞が介在していることになる。さて、A20の「遊びなど」の「など」の下の読点（）は、「遊びなど」を「したまひて」の被補助語とみることに抵抗する姿勢を示しているように感じさせるようである。しかし、その「遊び」を連用形名詞と見なければならぬ理由はどこにもない。そこで、その読

点を外した「遊びなどいとおもしろうしたまひて」は、
 「たいそう風情あるように管絃などを楽しんだりな
 さつて」というように解され、「いとおもしろう」は、
 例示としての動詞「遊ぶ」を修飾していることになる。
 イ22の「をさをさ」も、イ23の「え」も、修飾してい
 るのは、例示としての動詞「答ふ」である、と見なけ
 ればならないことになるであろう。その結果として、
 イ22の「答へもをさをさせず」の、その現代語訳も、答
 えたりもほとんどしない」ということになるであろう。
 イ22・イ23の「も」は、その打消表現を強調している
 こと、これまでも、多く見てきているところである。

10 連用形名詞に格助詞「を」を添えたり、非表

出のヲ格を挟んだり、時には、その下に係助詞
 を介在させたりして、他動詞「す」を伴ってい
 る表現（C形式・D形式・G形式・H形式）の、
 その「す」の上に、副詞、または副詞相当語句
 を介在させた表現（J表現）

格助詞「を」を表出していないなくても、とにかく
 ヲ格の関係で下接する連用形名詞が、続けて他動詞

「す」を伴っている表現の、その「す」の上に、副詞、
 または副詞相当語句が存在している、そういう表現を
 観察していることとしているのである。

ア21〇…、夜昼、学問をも遊びをももろともに[□]た
 まひて、をさをさ立ちおくれず、いづくにて
もまつはれきこえたまふほどに、…。(①帚
 木32)

ア22〇をりふしに従ひては、御遊びなどを好ましう
世の響くばかりに[□]させたまひつつ、今の御あ
 りさましもめでたし。(②葵17)

ア23〇大将殿かう静かにておはするに、世ははかな
 きものと見えぬるを、ましてことわりと思し
 なして、常に参り通ひたまひつつ、学問をも
遊びをももろともに[□]たまふ。(②賢木139)
 ア24〇…、私さまのかかるはかなき御遊び「ヲ」も
めつらしき筋にに[□]させたまひて、いみじき盛
 りの御世なり。(②絵合口322)

イ24〇…、匂宮「…」とことわりなう問ひたまへど、
 その御答へ「ヲ」は絶えてに[□]せず、他事は、い
 とをかしくけ近きさまに答へきこえなどして

なびきたるを、いと限りなうらうたしとのみ
見たまふ。(⑥浮舟130)

さきの9 (I形式)と、この10 (J形式)との、最も大きな留意点は、そして、最も大きな相違点は、それぞれの表現のなかの副詞、または副詞相当語句が、連用修飾語としてどのように機能するか、という点である。I形式の母体をなすA形式・B形式が、動詞に係・副助詞を共起させた結果、補助動詞「す」が起用された表現であるところから、そのJ形式に見る副詞や副詞相当語句は、それぞれの動詞を修飾する連用修飾語である、と判断される。それに対して、C形式・D形式を母体とするJ形式において、その他動詞「す」の上にある副詞や副詞相当語句は、その「す」を修飾する連用修飾語であり、やがて、一体化して一概念化する、という理解が肝要である。その「す」が形式動詞だからである。

ア21とア23の「学問をも遊びをももるともにす」は、並立の係助詞「も」からも、その「もろともにす」は、〈併せ行う〉という一概念ともいえるもので、それで一単語の動詞とも見えてくるものである。ア22の「好

ましう世の響くばかりす」は、「好ましうす」と「世の響くばかりす」という、二概念で、二単語の動詞を対偶中止法の構造で表現しているものといえよう。ア24の「めづらしき筋にす」もまた、どんな催し方で催すかを一概念として表現しているもので、〈目新しい趣向で催す〉意の一単語の動詞と見えてくるのである。それぞれの「す」は、活用機能を担うだけで、それだけの概念は、一般には、副詞とか副詞相当語句とかいわれるものが担っているのである。

イ24の「絶えて」という副詞は、一般には副詞とされるが、ここでは、「絶えてせず」が〈まったくしない〉という一概念で、「絶えて」と「す」とが概念を、「せ」と「ず」とが活用を担っていて、「す」は概念にも活用にも機能しているものと見えてくるのである。なお、ここで、「御答へ」という「御」を冠した「答へ」の動作を「す」で表しえたのは、「絶えてせず」となっていたからであろう、と解している。

9 (I形式)と10 (J形式)との、それぞれに介在する副詞、または副詞相当語句の機能については、学
校文法からはあまりにも遠い哲学となつてしまつた

が、しかし、これら諸表現の読解は、ここに至って完結したものとなる、と思っている。

第三章 「あそび」と「す」／「いらへ」と「す」

によって構成された十形式の再整理と、「す」の再認識

「あそび」と「す」／「いらへ」と「す」は、あまりにも多様な表現形式を構成してしまった。その多様な表現形式を認識順序にも配慮して、十形式に整理してみた。前置きなしで、直ちにその十形式を学習書的要領で紹介してみた。前章第二章が、以下のように受けとめられていたら、その理解が徹底したと思つてよいであろう。

「あそび」と「す」／「いらへ」と「す」が構成した表現形式が多様であるといつても、それぞれの基底にあるのは、A形式・B形式とC形式・D形式とに限られる。そのA・B形式はそれで一組とするのもでき、C・D形式もそれで一組として受けとめることもできる。そのA・B形式の「す」は、補助動詞「す」、C・D形式の「す」は、他動詞「す」である。

E形式は、E形式を設けるかどうかで悩まされる。D形式とも解せるからである。そのE形式の動詞「す」は、結局、自動詞をつくる「す」ということになる。その「す」そのものが自動詞ではないことも確認しておきたい。

F形式についてもまた、悩みを抱えている。いちおう、A形式を母体に行っているものと見たが、D形式を母体とするものかとも見えてくるからである。その「す」については、補助動詞と見ようと努めて、そう解した。

G形式・H形式の読解を通して、格助詞「を」や非表出のヲ格の上の「など」については、副助詞とすることへの疑問が湧いてきた。また、C形式・D形式も含めて、G形式・H形式の「す」は、当然、他動詞「す」であるが、その訳出は、実に幅のあるもので、場面々々で、多様に読みとられてきているようである。

I形式とJ形式とは、それぞれの表現に介在している副詞、または副詞相当語句が連用修飾語として、かかっていく被修飾語については、大きな違いが見えてきた。I形式に介在しているそれら副詞や副詞相当

語句は、直下の、補助動詞「す」を修飾するのではなく、補助動詞「す」の被補助語となっている動詞にかかっていくものと見なければならぬようである。一方、J形式に介在している、それら副詞や副詞相当語句は、直下の他動詞としての形式動詞「す」と一体となつて一概念を担っていると見なければならぬようである。

第四章 小稿の調査結果から指摘する大島本・胡蝶

巻の誤脱箇所

一般的には、本章は、小稿の副産物ということになるであろうが、実は、小稿そのものの契機となつているのが、『源氏物語』胡蝶巻の動詞「す」の異常な用例に気づいたところにあること、第一章において既に触れてきているところである。いま一度、その該当本文を引くこととする。

○殿の中将は、すこしけ近く御簾みすのもとなどにも寄りて、御答へみづからなどするも、女はつつましくうせせど、さるべきほどと人々も知りきこえたれば、中将はすくすくしく思ひよらず。(③胡蝶

175)

右本文を動詞「す」の異常な用例とはいつたが、実は、その現代語訳との不一致が気になった、というところから始まったのである。次の傍線部の本文は、どこを訳したのかという単純なことだったのである。

○殿の中将が、いくらか親しくして、御簾みすのそばなどにも近づいたりするので、女君ご自身も思ひ対申し上げたりなさるにつけ、恥ずかしくお思ひになるけれども、それが当然の姉弟の間柄と誰もが存じ上げているのだし、また中将もかたくるしくまじめ一方のお方とて色めかしい心など、まるでお持ちでない。

そこで、直ちに、新日本古典文学大系『源氏物語』の該当箇所を開いてみた。しかし、これも、同じ本文であった。続いて、確認するまでもない新編日本古典文学全集『源氏物語』③の凡例を一読した。この巻の底本は大島本という、誰もが知っていることを改めてこの目で受けとめ、巻末の「校訂付記」では、その該当ページに何もないことを確認した。以下に、その大島本の、その一文を引く傍線部がその一文／該当す

る行の校異―こととする。

におやかりはつましき御心やそふらむちゝおとゝにもしらせやしてましなとお
 ほしよるおりくもありとのゝ中將はすこしけちかくみすのもとなにもより
 て御いらへ身つからなとするも女はつゝましようおほせとさるへきほとゝ人く
 もしりきこえたれは中將はすくくしくておもひもよらす内のおほいとゝ君
 4 8 2 1

【青表紙本】

④身つからなとするも―みつからきこえ給なとするも宵―身つからきこえ給なとするも三

【河内本】

③身つから―身つからきこへ給御七宮尾平鳳

【別本】

⑤なと―きこえなと陽保―聞え給なと麥阿

青表紙本系が二本を除いてこの誤脱を犯しており、河内本系がそこに適語句を補ってくれていたが、昭和末・平成の校訂では、そこに気づかなかったようである。とにかく、この部分には、せめて注が欲しいと思う。

では、どうして、現代語訳に「申し上げなさる」が入っていたか、である。例えば『対校源氏物語新釈』本文は、近世の湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所蔵の河内本と対校したものであるが、そこには、その部分に「(御いらへ自ら)聞え給ひ(などするも)」――『対校源氏物語新釈卷三』二七ページが入っていたのである。新編日本古典文学全集『源氏物語③』の胡蝶の現代語訳が何を参考に進められたかは存じ知るところではないが、何か、「聞こえたまひ」を含む本文に拠ったかにも見えてくるのである。

さて、筆者が、どうしてここに、その「聞えたまひ」を必要と思うかについては、まだ述べていない。その理由は、二点に絞って説明するのがよいと思う。一つは、「御答へみづからなどするも、」の副詞「みづから」の下に助詞「など」が位置していた点(甲)で

ある。いま一つは、「御答へ」については、非表出のヲ格に続けて他動詞「す」を用いることは、原則的ではない点(乙)である。

甲については、第二章のI形式・J形式で確認しているところである。副詞は、補助動詞であろうと他動詞であろうと、いずれにしても、「す」の直上に位置するのが原則である。「など」の上に副詞が位置する用例には出会えていなかったからである。

乙については、C形式において、「御答へ」が格助詞「を」と他動詞「す」とを伴って構成された表現が見当たらない実態を報告してきている。また、同趣のことがD・O形式においても読みとれるようになってくる。さらにそのD形式の末尾に、×××印以降に、この問題に関係する一用例を引いて、本章において改めて取り上げる旨の予告しておいた。近いところでは、J形式のイ24の「御答へ(ヲ)は絶えてせず」に関連しても触れておいたところでもある。

その「御答へ」については、多くの用例が存在する。そして、その「御答へ」が格助詞「を」を添えたり、非表出のヲ格が想定できる格関係になったりした場

合、それに続く動作は、その殆どが「聞こゆ」「聞こえたまふ」によって表現されているのである。

○…、よろづのことを泣く泣く契ちぎりたまはずれど、

「御答へ」「ヲ」も聞こえたまはず、…。(①桐壺

22)

以下、類用例として、「うちどけたる御答へ」「ヲ」も聞こえず。(①帚木109)／さるべきをりをりの御答へなど、「ヲ」なつかしく聞こえつつ、「(①夕顔10)／いかにはかはかしき御答へ」「ヲ」聞こえさせたまはむ」として、(①若紫353)／あいなる御答へ「ヲ」聞こえにくくて、「(①紅葉賀312)／御答へなど、「ヲ」(うち)聞こえたまへるは、「(①紅葉賀322)／御答へ「ヲ」も聞こえたまはねば、「(①紅葉賀335)／「はかなき御答へ」「ヲ」も心安く聞こえんも」(②葵30)／「御答へ」「ヲ」時々聞こえたまふも、」(②葵44)／「夢にも御答へをいします」聞こえずなりぬること」(②明石230)／「あるべきふしの御答へなど、「ヲ」浅からず聞こゆ。」／御答へ「ヲ」も聞こえ(やり)たまはず」(②薄雲446)／「むげに絶えて御答へ」「ヲ」聞こえたまはずらんも」(②薄雲462)／御答へ「ヲ」聞こゆと

思すに、「(②朝顔495)などを挙げるができる。以上は、新編日本古典文学全集『源氏物語』六冊のうち二冊までに見た十四用例である。さらに、十六用例を検出して、都合三十用例を見ることになる。その動作を尊敬語「のたまふ」で表現する「御答へ」などをも、おぼえたまひけること「ヲ」は、いはげなく(うち)のたまひ(出で)て、「(④若菜上4)も現れるが、文脈からも、「御答へなどをも」からは遠ざかっていて、直前の「おぼえたまひけること「ヲ」は」に引かれているようにも思える。とにかく、「御答へ」と、その動作をいう謙讓語「聞こゆ」「聞こえたまふ」は、緊密に結びついているのである。

そこで、第二章のD形式の末尾の×××印以降の番外用例をいま一度引いてみようと思う。ここでは、その部分で、『対校源氏物語新釈』本文を引いてみることにする。

○源氏「あなうたて。これはいとゆゆしきわざよ」とて、よろづにこしらへ聞え給へど、誠にいとつらしと思ひ給ひて、露の御答へ「ヲ」も聞えたまはず。『対校源氏物語新釈卷一』葵374(ページ)

その部分、河内本には「露の御いらへ〔ヲ〕も聞えたまはず。」とあるのである。そのように、「御いらへ〔ヲ〕」とあつたら、「し」ではなく、「聞え」で表現するのが、当代の原則だったのである。河内本本文の語法の確かさに敬意を表したい。

以上の確認を重ねた結果として、胡蝶の巻の、その部分は、次のようにして読んでいきたいと思う。

○殿の中将は、すこしけ近く御簾のもとなどにも寄りて、御答へ〔ヲ〕みづから聞こえたまひなどす
 〔る〕も、…。(胡蝶の巻・策定本文)

右に既に図解したように、「聞こえたまひ」を補った「聞こえたまひなど」は、補助語「するも」の被補助語であつて、(こ)返事を自身でお申し上げになつたりなどなさるのも、というように理解されるのである。謙譲の動詞「聞こゆ」が尊敬の補助動詞「たまふ」を添えた「聞こえたまふ」に、例示の副助詞「など」を共起させた結果としての「聞こえたまひなど、す」であつて、小稿でA形式と呼んだ表現形式の表現だったのである。

そのように、敬譲の補助動詞を添えた二単語なり三

単語なりを一単語相当として「など」で共起させた用例は、前稿「例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について」の第五章に關係各用例を引いてある。例えば、「内裏の御宿直所に参りたまひなど、す」(①夕顔183) / 「おどろかしきこえたまひなど、すれば」(②葵191) などである。因みに、「答ふ」に關係する用例として、「さるべきことは、答へ聞こえなど、す」(①帚木196) / 「他事は、いとをかしくけ近きさまに答へきこえなど、す」(②なびきたるを) (⑥浮舟180) を挙げることができる。

以上で、大島本・胡蝶の巻の誤脱部分の補訂を終了することとする。

〔残った二枚のカード〕

今回の調査と整理に先立って、あらかじめ採集したカードは、ほぼ小稿のどこかに活かすことができたが、二枚だけは、触れる機会を逸したまま、残ってしまった。

○尼君の答へ〔ヲ〕うちする声けはひ、宮の御方にもいとよく似たりと聞こゆ。(⑤宿木188)

○…、かかる心の深くありける人なりければ、ははかかななきき答こたへへをももししそそめめじじと思おひひ離はるるるるなりけり、
 …といと口惜くしししううして、…。(⑥手習てなりり)

前者は、D・o形式とD・p形式との中間とでもいうことになろうか。D・o形式に、「連体修飾語を冠した」を含めたら、そこに属することになったろう。後者は、C・n形式に属する用例である。とにかく、前者には、その「す」が接頭語「うち」を冠して「うちする(も)」、「となつていたのである。後者では、その「す」が、複合動詞後項型補助動詞「そむ」^{注6}を添えて、「しそめ(じ)」となつていたのである。形式動詞といわれる無概念の「す」が、接頭語を冠し、複合動詞後項型補助動詞を添えていたのである。

欲張った題目にどれほどに応ええたか、多くの不備と不安とを残して擱くこととする。

注

①拙稿「例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について」(『國學院雜誌』第一一六巻第六号・平成二十七年(二〇一五年)年)。

②拙稿「補助動詞「す」の論」(『國學院雜誌』第七十五巻第六号・昭和四十九(一九七四)年)。

③拙稿「居言雜考―その造語経緯について―」(『國學院高等學校紀要第21輯』昭和六十二(一九八八)年)。
 ④山田孝雄『日本文法論』(宝文館・明治四十一(一九〇八)年刊)の第一部第三章の五八二ページに、第四節「格副二助詞の關係及副助詞の性質」という節が設けられていて、そこに、格助詞と副助詞との上下の位置關係について述べてある。小稿の本章においては、「など」「ばかり」がヲ格の上に位置することに注目したことを確認する意味で、同書の關係箇所に触れておくこととした。

⑤筆者自身の体験からいえば、『新明解古語辞典』(三省堂・昭和四十七(一九七二)年)で理解した日があつた。

⑥大槻文彦『大言海』(富山房・第二巻)昭和八(一九三三)年の自動詞「す」の語義へアル。起ル。感ゼラレル。のうちの(感ゼラレル)を承けて、筆者は、平生(感じられる)と解するように努めている。

⑦筆者自身が文字化された注意事項として受けとめた

のは、今泉忠義著『標準国文法』（旺文社・昭和二十九（一九五四）年）によってである。同書第三編第十二章助詞の二六一ページに「〔注意〕「など」は複数ではない―「など」を複数を表す接尾語とするのは誤である。」として、「○いにしへゆくさきの琴どもなどいひて」（伊勢、一二）が引かれていた。誤解される恐れがあるほどに微妙なはたらきあるものと見たいと久しく思っている。また、その後、大槻文彦が接尾語としていたことを知った。なお、念のため重ねていっておくと、ここでは、格助詞「を」の上のそれについてだけいおうとしているのである。

⑧ 本来は、山田孝雄『日本文法学概論』（宝文館・昭和十一（一九三六）年）や、松下大三郎『改撰標準日本文法』（紀元社・昭和三（一九二八）年／改訂版Ⅱ昭和五（一九三〇）年）で用いられている術語で、山田は、いわゆるサ変動詞「す（する）」を、松下は、作用の形式的意義だけを表し実質的意義を欠くものとして「旅行する」「教へてやる」「泣いてゐる」の類を挙げている。ここでは、「す」に実質的概念が

なく活用機能だけの動詞という意味で、この術語を借用した。

⑨ 中止法による対偶表現のうち、下位の語句に直接する語や語句に上位の語句も関係する文構造というもので、この場合、「好ましよう」も「世の響くばかり」も、ともに動詞「す」を修飾する関係にあることをいっただけのもの。

⑩ 新日本古典文学大系『源氏物語二』（岩波書店・一九九四（平成六）年）。

⑪ 新編日本古典文学全集『源氏物語③』（小学館・一九九六（平成八）年）。

⑫ 池田亀鑑『源氏物語大成卷二校異篇』（中央公論社・昭和二十八（一九五三）年）。

⑬ 吉沢義則『対校源氏物語新釈』（平凡社・昭和二十七年（一九五二）年）。

⑭ ここに想定される格は、「聞こえにくし」との格関係なので、厳密には、現代語のガ格となるであろうが、いま、「聞こゆ」との格関係に限っておくこととする。

⑮ 源光行・親行の父子が二十一部の古伝本を比較校量

して改訂本文としての河内本を作ったとされているが、その作業は、単なる比較校量ではなく、一定の語法の素養をもって策定本文を作成したものと感じている。

⑩拙稿「補助用言と、その取り扱いについて」（『國學院大學紀要』第三十二号・平成六（一九九四）年）において、「F」群とした一群の補助動詞で、併せて発表した拙稿「補助動詞各説」（『國學院大學栃木短期大学紀要』第二十八号・平成六（一九九四）年）において、その「F」群を複合動詞後項型補助動詞と呼んだ。独立動詞「初む」の補助動詞化したものとして、そこに収録してある。